

文学研究(古典)

保科 恵

表現の観点から、近時の研究の動向を概観しようとする時、専門的に細分化された論考を採り上げることが、有効であるかどうか、むしろ、一般向けのものではあっても、大局的で概括的なものを採り上げて紹介することに、存外意義があるのではないかと愚考して、昨年刊行されたものの中から、表現の問題を考えるうえで興味深いと思われる著書3点を、ここに採り上げることとする。

まず、小松英雄による、仮名文の表現の特性を解明しようとする一連の著書の最新刊『伊勢物語の表現を掘り起こす《あづまくだり》の起承転結』(笠間書院、2010年8月)である。その表現するところについてはほぼ読み解き尽くされた感があると言って良いほどの有名古典である伊勢物語を、改めて、それが仮名で書かれた表現であることを前提に、読み直そうとする営為である。

一例を上げれば、初段の冒頭部分、「昔、男、奈良の京春日の里に……」と読解されて異論のない箇所について、仮名連鎖「かすか」を、「微か」→「春日の里」の複線構造の表現と捉えて、「微かに記憶に残る春日の里」という表現であるとする如きものである。

個々の所説を仔細に検討することは、ここではあまり意味がない。重要なのは、古典作品の表現を解説するうえで、一語一句の意味を切り離して考察するのではなく、仮名文の特性を踏まえたうえで、作品の表現を解き明かす必要性を指摘している点である。

続いて、白石良夫『古語の謎 書き替えられる読みと意味』(中公新書、2010年11月)。

古典の作品において、著者自筆本が現存していることは、ほとんど皆無であると言って良い。その理由が、戦乱など、偶然の要因に求められることも少なくないけれども、本書では、古典作品の享受においては、オリジナル(=自筆本)の尊重という思想はなく、むしろ、自然な現象として、本文の定本化の中で、オリジナルを含むそれ以前の本文が放棄された結果であるとする。

上述の所説は、これに先立って刊行された、外山滋比古『異本論』(ちくま文庫、2010年7月)の説くところに、相通じるものがある。これは1978年に刊行されたものの再刊だが、上記書とほぼ時を同じくして刊行されたところに、その意義浅からぬものを感じる。

原本と異本の関係において、前者を優位とし後者を劣位と看做するのが、常識的な見解であろう。だが、作品が古典となるのは、単にそれが古いからではない。本書は異本の創造性を積極的に認定して、異本化作用によって「古典」が成立するメカニズムを、鮮やかに解明する。

古典作品の表現は、このメカニズムのうえに成立する。そういう古典表現のありようを踏まえながら、それを如何に読み解くか、ということである。

刊行から30有余年を経た今日でもなお、本書は斬新で有意義な視点を提供している。古典作品の表現を考えるうえで、現在の時点において読み直してみる意義は、けっして少なくないであろう。

(二松学舎大学(非))